

103 「赤い翼：パリー東京」プロジェクト（2022年3月17日）

1936年、パリー東京100時間懸賞飛行に挑戦したフランス人パイロットがいました。アンドレ・ジャッピー（1904-1974）は、コードロン・シムーン機を操縦して日本までは到達したものの、悪天候のために福岡県と佐賀県の県境にある背振山に墜落し、ゴールである東京まで飛行することができませんでした。100時間飛行は、ジャッピーの後に挑戦した5組のパイロットがいずれも成功できないほど、困難なフライトでした。現在、ジャッピーが操縦したコードロン・シムーン機と同型の機体を復元し、ジャッピーが飛行できなかった佐賀ー東京間の飛行を実現しようとする「赤い翼：パリー東京」プロジェクトが進行しています。

コードロン社は、20世紀前半に存在した航空機メーカーです。1930年代は、技術革新を競うための飛行レースが行われました。シムーン機は、長距離耐久飛行を目的とした航空機でエンジンの耐久性に優れていたとされています。貨物用や軍用として使われ、当時の冒険家たちを魅了しました。「星の王子様」の著者であるアントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリや、1936年にセネガルのダカールとブラジルのナタールを12時間で飛行したフランス人女性パイロットのマリーズ・バステイエもシムーン機を操縦しました。

ジャッピーは、1936年の飛行レースにコードロン社のパイロットとして単独で参加しました。ゴールを目前にして背振山で墜落したジャッピーは、地元村民の賢明な救出によって九死に一生を得て生還しました。この出来事が縁となり、旧背振村（現在の佐賀県神埼市）とジャッピーの出身地であるボークール市（ブルゴーニュ・フランシュコンテ州テリトワール・ド・ベルフォール県）が、1996年に姉妹都市提携を結びました。



©Association pour la Renaissance du Caudron Simoun

ジャッピーは、日本滞在中に二人の若い日本人パイロットと出会いました。当時、日本の新聞社が、イギリスのジョージ六世の戴冠式取材のために東京ーロンドンの飛行を計画していましたが、旧ソ連領空内が飛行禁止となっていました。ジャッピーが日本のパイロットたちに南ルートでの飛行計画を支援したおかげで、新聞社は東京からパリ経由でロンドンまでの往復の飛行に成功しました。このように、ジャッピーは日本の航空技術の発展に貢献しました。

パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本



現存するシムーン機は、二機しかありません。一機は、パリのル・ブルジェ航空宇宙博物館に展示されています。もう一機は、コードロン・シムーン機復元協会（副会長は、アンドレ・ジャピーの子孫であるニコラ・ジャピー氏）が所有しており、パリ郊外のポントワーズ飛行場にありますが、機体の部品はすでに製造されておらず、設計図も残って

いません。15年以上の年月をかけて、各地から当時製造された部品が集められました。コードロン・シムーン機復元協会の会員で専門技術を持つボランティアが、試行錯誤をしながら復元作業を進めています。

復元が完了したら、2023年にフランス国内でテスト飛行とデモンストレーション飛行を行い、パリ五輪が開催される2024年に佐賀と東京のフライトが行われる予定です。プロジェクトの実現に尽力された方々の夢と希望を乗せて、赤い翼が日本の空を駆け抜ける日を今から心待ちにしています。

